

「宙づり」の時間と空間

——新潟県への原発避難の事例から——

新潟大学 松井克浩

1 目的

福島第一原発事故により避難を余儀なくされた人びとは、これまで多くの被害と喪失を経験してきた。にもかかわらず、そうした被害を「口にできない」場合が少なくないという。避難や賠償、放射能への考え等をめぐって被災者間や周囲との間にさまざまな分断線が走り、相互のコミュニケーションが成り立ちにくくなっている。被害を言葉にできないことは、それ自体が深刻な被害であるといえるし、原発事故の「風化」につながることもあるだろう。原発事故被災者は、なぜみずからの被害について口をつぐまざるを得ないのだろうか。本報告では、被災者が置かれた状況を「宙づり」という言葉で捉え、その視点から分断と被害のいくつかの側面を明らかにする。

2 方法

報告者は2011年6月から現在まで、福島県から新潟県への広域避難者を主な対象としたインタビュー調査を継続してきた。対象者は避難指示区域内・区域外の双方を含み、人数はこれまでのところ41名である。間隔をおいて繰り返しインタビューしたケースも多く、回数でいうと59回になる。本報告では、この聞き取りによるデータを中心的な資料として用いる。また新潟県が中心となって、2017年秋に、県内への避難者（すでに福島県等に帰還・移動した人を含む）1,174世帯を対象とした郵送調査を実施した。この避難者アンケートの自由回答についても補助的に用いたい。

3 結果

原発事故からの避難生活が6～7年経過した時点でも、被災者の多くは不安と迷いを抱えた不安定な生活を送っている。どこか地に足のつかない浮遊感、「宙づり」の感覚にとらわれている人も少なくない。被災者の「語り」から、こうした「宙づり」を構成する3つの次元が設定できる。第一に、時間の次元である。被災者は、カレンダー通りに進行する時間（たとえば子どもの学年）と止まったままの「時」（たとえば避難元の自宅）との間でなかなか折り合いをつけられない。第二に、空間の次元。避難先の空間で日常の暮らしを営んではいるが、「ここは私のいるべき場所ではない」という感覚から逃れられない。かといって、当面は避難元での生活再建は考えられないし、戻ったとしても元通りの生活空間が取り戻せるイメージはわからない。そして第三に、関係の次元。被災者は、避難先での暮らしを維持するための関係構築に努力しながらも、時間と空間を他者と共有する確かな経験、固有の「誰か」として見られ聞かれる手応えを喪失している。

4 結論

上記のいずれの次元においても、被災者は避難先での生活を何とか成り立たせている。しかし、それはあくまでも表面的なものにすぎないのであって、深層・内面においてはギャップや喪失を抱え込んだままである。それは外側からは見えにくいし、本人も主観的で個人的なものだと思い込んでしまうために、他者に向けて「語る」ことは抑制される。口に出しても周囲の理解は得られないと、先取りしてあきらめてしまうのである。しかし他方で、「宙づり」であることを意識的・自覚的に継続するとすれば、そこに新たな可能性を見いだす余地がある。避難という経験は、災害前に埋め込まれていた社会からの距離化を強制的に実現する。この経験は失ったものを意識化し、自明視してきたことを認識し直すことにつながるだろう。「宙づり」を可能性と選択性の保持と捉え返すことによって、新たな道を開くことができるのではないか。最後にこの点を試論的に述べたい。